

生涯学習を媒介とした〈ひきこもり〉と社会との接合可能性

—高齢者の〈ひきこもり〉イメージを中心に—

檜垣 昌也

1. はじめに—問題の所在—

〈ひきこもり〉¹⁾という状態の若者が注目されて久しい。〈ひきこもり〉状態の若者は現在でも多く、「ニート」と呼ばれる若者の一部も〈ひきこもり〉状況にある。先般、文部科学省をはじめとした関係四府省が打ち出した支援対策「若者自立・挑戦プラン」や、各自治体や民間団体がおこなっている支援事業は、就労支援を目的とするものである。また、〈ひきこもり〉状態の若者に対しては、2000年以降すでに厚生労働省が対策を打ち出し、主に地域レベルでの援助活動の指針としてのガイドライン²⁾や、当事者や家族向けのパンフレットなどが作成されている。しかし、支援対策は十分とはいえない状況にある。筆者はラベリング論的視点から、この厚生労働省の取り組みは、ラベルを貼る者(規則執行者)の視点のみが強調されていると考えている。

ひきこもる者たちの実態を把握することは、その状況の特徴ゆえに、同居家族や近い親族といった重要な他者や、親密な関係を持つ友人といった、ごく限られた者、もしくは〈ひきこもり〉当事者やその近い関係者が診察・相談などをする専門職などに限られる。また、ある団体では、その支援方法をめぐって少なからずトラブルも発生している。このような現状の背景には、〈ひきこもり〉当事者が求める支援と各支援団体(機関)が目指す支援方法との不一致によるところが大きい。〈ひきこもり〉をめぐる支援は、家族を含めた〈ひきこもり〉当事者と支援者の二者関係の支援から、地域をも含めた社会的な支援へと、あらたな方式の構築が求められる時期にきている。

そこで本稿では、生涯学習の対象者として中核を占めるであろう高齢者からみた〈ひきこもり〉のイメージを聞き取るにより、生涯学習を媒介とした〈ひきこもり〉と社会の接合可能性を高齢者の意識から検討するものである。

特に高齢者世代の語りに注目し、当事者ではない者たち

がどのような経緯や根拠で自身のイメージを語るのかに注目する。

生涯学習の一環としての異世代間交流や地域内交流などに、〈ひきこもり〉支援を組み込むことができるのか、また高齢者世代が、主に若者の問題とされる〈ひきこもり〉に対して接点を持つことが可能なのか。またそのような環境整備にはどのような条件が必要となるのか。本稿はこれらの問いに対して明確な回答を示せるほどの豊富なデータは得られていない。しかしながら本稿での試みは、いくつかの試論を導く知見のひとつになりえると考える。

調査概要

〈ひきこもり〉という言葉は、〈ひきこもり〉と呼ばれる者とそれほど近い関係を持たない者にも何らかのイメージを持たれている。そのイメージは新聞、テレビなどのメディアの影響もあるだろうし、断片的な情報をもとに個人々が作り上げるイメージもある。

筆者は、これまで〈ひきこもり〉当事者(〈ひきこもり〉であると自認する者)だけではなく、〈ひきこもり〉ではない者にも〈ひきこもり〉イメージを聞き取ることをしてきた。それは、街行く人をつかまえてインタビューする街頭インタビュー的手法ではなく、個人が特定できる者に限定した半構成的面接調査である。この手法では、街頭インタビュー的手法などに比べ面接調査者の数は少なくなるが、語る者のライフヒストリーなどを知ることにより、語りの内容を深く分析することが可能になる。

調査概要に関しては、本稿では個人情報保護の観点から、個人が特定できない範囲にとどめた。事例についても同様の理由から、個人が特定・推測できないよう方言や地名などに修正を加えている。

①平成16年8月調査 東北離島在住

A氏 男性 84歳。生まれ育ちとも離島、牧師・元校長

調査時夫婦二人暮らし。小学生などが学習の一環として島を訪れるとA氏が島の歴史や自然などを子どもたちに教えているという。インタビューは婦人同席のもとでおこなった。

インタビューは昼休憩をはさみ、約2時間A氏宅でおこなった。島の歴史、人びとの暮らしの変遷、本土との関係、A氏のおいたち。結婚、仕事などライフヒストリーを語ってもらいながら、話は不登校、〈ひきこもり〉に及んだ。本稿ではその部分のみを提示する。

②平成16年9月調査 ・東北郡部在住三氏

B氏 男性 77歳 小学校校長経験者。定年退職後公民館館長などを引き受ける。

社会教育の一環としてA氏同様子どもたちとの関わりは現在もある。

C氏 女性 74歳 小学校教員を定年前に退職。地域婦人会会長などを引き受ける。インタビューは二人同時(夫婦であるため)にB氏宅でおこなった。

D氏 調査時79歳 結婚前は役場に勤めた経験はあるが結婚後は、専業主婦。現在一人暮らし。B氏の姉。インタビューは、B氏同席のもとD氏宅でおこなった。

インタビューはB、C氏と夕食をはさんで約2時間おこなった。インタビューのメインはB氏であり、B氏の小学校校長職時代、また定年後の公民館館長職時代の経験から子どもとの関わりを語ってもらった。C氏も教員経験者であり、家事で途中退席することもあったが、子どもの問題には関心が高く、戻ってきては様々な事例を提供してもらった。両氏の紹介でD氏にも話を聞くことができた。D氏の自宅で約30分ほどであったが、〈ひきこもり〉には関心があるようで、地方都市に離れて住んでいる孫の友達の話などを提供してもらった。

2. インタビューの内容と考察

(1)A氏のインタビューから

Q：不登校などの問題についてどう思うか

A：人間同士と生き物と一緒にいるということ。植物もあれば海の家草もあれば魚もあれば、空飛ぶものもあれば・・・そういうものとともに人間もいる。生き物の強さというものをこれから強調していかなければダメだ。余計なものを頭さ脳さ入れて、そういうものではなくて、根っこを強くもっていく、生きていく、くっついていくもの(海草)も死ぬまでくっついていく。泳いでいるものも死ぬまで泳いでる。・・・そういう生きる力をどうやっていくか

てことと、ただ人間形成だとかなんとかって、りっぱなそういうのではなくて、生きる強さってのをやっばり育っていかないと・・・。

一見、質問の内容に答えていないようにも思えたのだが、A氏が青年期のある時期島を離れた以外ほとんど島で生活をし、また牧師、教職として島で生活してきたこと。氏の言葉の随所に、哲学的心理学的な言葉が見られることから考えると、意味のある言葉である。

正式なインタビューではないのだが、島のみやげもの屋の女性からは、「ここはおじいさんとおばあさんの島」といった言葉も聞かれた。また、不登校の子どももいなかったし、〈ひきこもり〉という言葉も実感がないという話を聞いた。A氏の息子は本土で教員をしているということで不登校や〈ひきこもり〉については身近ではないにしろ、現在問題にされていることは認識しているようである。氏の「生き物の強さ」「根っこを強くもっていく」「生きる強さってのをやっばり育っていかないと」という言葉からは、現状の〈ひきこもり〉という状況を示す子ども(若者)たちへの訓示が読み取れよう。氏は明確に〈ひきこもり〉について否定的な感情を表さないが、不登校を含めた〈ひきこもり〉という人間の状態については否定的な視点を哲学的な人間観から提示しているといえよう。

(2)B氏、C氏、D氏のインタビューから

①B氏

ここではインタビューの一部分を提示する

Q：〈ひきこもり〉という言葉を知ったのは？

A：ひきこもりとか不登校といった言葉でくくってしまうと、それで問題は半分解決したような形になるんじゃない。それは不登校、それはひきこもりなんだって。そういう原因は何かあってそうなるんだと。半分は解決したような感じになってしまうんだが、ああいうくくり方は、あんまりしたくないような気がするな。それもいろいろ子どもによってあるいはその環境によって微妙にいろいろな違いがあるからね。それをじゅっぽひとからげにこれはひきこもりなんだっていったって、ひきこもりの中にさらにまたわけなきやなんない。ひきこもりの中にもね、こういうひきこもりもあればこういうひきこもりもあるっていろいろあるのにな。ひとつにひきこもりって捉えるのはどうかと思うけどね。

Q：イジメとの関係について

A：いつの時代にもいじめたりいじめられたりってのは

あったんでないかね。いじめられて帰ってくるとおじいさんが「いじめたのはだれだ」って怒って文句いいにいった。それでも昔は大事にならなかった。今は泣いて帰ってくる子どももいない。いじめられても家に帰ってくるときには何もなかったように帰って来るでしょ。状況が変わってきてるでしょ。いじめられて泣いて帰ってくる子どもって今見られないでしょ。

ただ、私はね、子どもはもっとこう強く育てるべきだと思うけどね。今少し軟弱に育てるきらいがあるんじゃないかな。子どもに敬語つけてね。

Q：民間の不登校・<ひきこもり>対策について

A：・・・難しいなあ・・・状況によるね。それでいい場合もあるし、必ずしもそれでよくない場合もあるだろうし。

Q：最後にまとめとして

A：ひきこもりを悪と考えたらだめだろうね。ひきこもりも・・・それもそうだなっていったふうな容認する立場とらなければだめなんじゃない。

Q：親御さんたちは悪と思ってるんでしょうかねえ？

A：悪って言うんじゃないくて、このままでは将来この子はどうなるだろうなっていうような心配をするんだろうね。このままでは、親たちがいなくなった後この子はどうなるだろう、世の中生きていけるだろうかっていったような心配なんだろうね。

Q：そこで医者にたよってしまうんでしょうね

A：ただ病気、こいつは病気なんだって、薬かなんかで治るっていう・・・そうは考えられないな・・・なかなか・・・。

B氏も長年教育職を務め、多くの教え子を持つ経歴の持ち主である。初めの筆者の質問に対して、「ひとつにひきこもりって捉える」ことに対して否定的である。ここから読み取れるのは、子どもの個性を尊重する教育者の視点があるということである。この点は民間の不登校・<ひきこもり>支援対策について「状況によるね」と画一的な支援対策について否定的な認識をもっていることから読み取れる。最後に「ひきこもりを悪と考えたらだめだろうね」「それもそうだなっていったふうな容認する立場とらなければだめなんじゃない」という考えを提示していることからB氏の子ども観が読み取れる。いじめに関連した筆者の質問には、昔の事例からいじめの存在の普遍性を示しつつも、「状況が変わってきてるでしょ」「いじめられて泣いて帰ってくる子どもって今見られないでしょ」といじめを

取り巻く環境の変化に言及している。そして、「子どもはもっとこう強く育てるべきだと思うけどね」「今少し軟弱に育てるきらいがあるんじゃないかな」と子ども自身についてではなく、その親の子育ての問題点を指摘している。この視点は、先生が怒れなくなったという現状を説明するくだけりからもみてとれる。

このようにB氏の語りからは<ひきこもり>に対する否定的な見解は見られない。しかし、親の育て方に対する苦言からは、親を含めた現在の<ひきこもり>をとりまく状況を肯定的には捉えていない。現状は精神科医などが介入し、治療という方法が存在していることに対しても、「薬かなんかで治るっていう・・・そうは考えられないな・・・なかなか・・・」と否定的な見解を示している。

②C氏

ここではC氏が語るひとつの事例を提示する。カッコ内は筆者が補足している。

一郎(仮名)の友達、部活(運動部の先輩があんまりいい先輩でなかったみたいで)が原因で1年生になってからまもなく不登校になって、そのうちの中でもねえ、家の中の人にも会わなくなったの。それがたまたま私のいとこの孫がそうになったの。ちょうど向こうにいるもんで、全然学校に行かなくなって、そのクラスの子どもたちがたまたまいい子どもたちで、だから、何とかを貸してあげたりして交代交代で行ってたみたい。班を編成するにしてもみんな誘いに行って、友達はみんないい子で、もしかしたら出てくるようになるかもしれないと。とうとう、二年になっておばあちゃんがなくなって、おばあちゃんとは家の中でもいい仲だったと、先生もよかった。(学級)通信とか、なんだかもみんな届けてくれて卒業式にはぜひ出でほしいと。みんなのそこ出てくるの嫌だったら、みんなが帰った後、校長室であげるから出てらっしゃって・・・それで出てくるかなってみんな心配して。男の先生は羽織袴で・・・期待して待ってたら・・・やっぱり来たんですって。そんでもう先生方はもう感激して、みんなして泣いたそうです。私もそれ聞いて感激してね、まったくの他人でなかったから。その後どうなったかっていうの孫も高校へいってから忙しくてぜんぜんこないからね。ふとしたきっかけで<ひきこもり>になったみたいねー。

孫とは一緒に暮らしてないけど、学校は行ってるみたいで安心はしているんだけど・・・

C氏はこの事例の他にもいくつかの事例を語ってくれた。この事例はあることがきっかけで不登校になってしまった子どもがまわりの働きかけもあり、また先生がいい先生だったこともあり、最後には登校するというストーリーである。いわゆるハッピーエンドなストーリーであり、C氏の語りには他にも、今はいいお嫁さんになっていたりする事例もある。また、上記の事例は、部活の先輩が不登校の原因として語られた事例であるが、C氏の語る事例には、先生が原因になっている事例もある。またその後どうなったかわからないという。グレーなエンディングの語りもあった。ここで上記の事例を挙げたのは、「(登校して)感激して、みんなして泣いた」、「学校は行ってるみたいで安心はしている」という語り注目したためである。感激して泣いたのはC氏ではないが、このことを語るC氏の背景には教員としての立場が読み取れる。様々な努力をしてその指導に子どもが応えてくれるということは、教師という仕事を長年務めてきた者にとっては当然肯定すべき事柄であろう。この教師と子どもの相互作用を否定するならば、この語りの後段で「学校は行ってるみたいで安心する」C氏の心情を示す語りは出てこないはずである。このことから考えて、C氏は、不登校や<ひきこもり>といった状況そのものには否定的であるとみることができるだろう。

③D氏

ここではB氏D氏筆者の三者での会話の一部分を提示する。

B氏：〇〇君(筆者)から聞くとね、あっちの都会の方ではひきこもりってのは病気だ心の病気だっていうふうに捉えてお医者さんの治療が必要だって今のへんあたりで考えるのとは違うんでないかって思った。

D氏：ただひきこもりっていう言葉のときの状態はどういうの？

筆者：ですよね。あの一、Dさんは<ひきこもり>って言葉知ってました？

D氏：ひきこもりって言葉、うーん。

B氏：言葉は知ってるさー。

D氏：言葉は知ってるけども。まあ。大抵テレビだね。うーん。

筆者：お説教するおばさんが出てきて寮にいれちゃうみたいなの。

D氏：それは知らない。それは知らない。

筆者：じゃやっぱりただ部屋にこもっちゃうっていうよ

うな。

D氏：そうそうそういうあれをひきこもりっていう。昔からひきこもりってね、あるんだよね。昔からあるんだよね。ひきこもりって言葉はね(B氏を見る)。…ただ、ひきこもりっていうのはやっぱり人に会うのを嫌ったりなんかして、結局外出も嫌う、人中へも出ない、そういうのをひきこもりっていう、あれだと思ってたよ。昔からってばね。前々からね。でも現代のあれってのはそれよりもっと深刻な状態なの？

筆者：俺くらいの年になっても10年20年ひきこもってるから、履歴書に書けないから就職も大変なんじゃないかなってこと。

D氏：そりゃそうだね。

筆者：だから深刻っていうのはそういう面で深刻だと思うんで。

B氏：だから親たちはね親はだんだんよわくなって死んでいくんだけど、この子どもは将来このあとどうなるだろうっていう親の心配はあるんでねの。

筆者：そりゃそうでしょうね。

B氏：そのへんが深刻なんだが。

D氏：親がいるうちはなんとかね。

B氏：親がいるうちは親が面倒見ているけれども親が死んだらどうなるかっていうその後が心配だっていうね。

D氏：で、〇〇君(筆者)がいろいろあれしてるのは親の方？本人のこと？

筆者：あの一両方っていうよりも本人でも親の方でもないの。

(以下インタビューの現状説明)

<ひきこもり>って悪いイメージがあるのかなって、たとえば不良とかあるじゃないっすか、そういうのと一緒にやっぱひきこもりっていうのは不良みたいなイメージがあるのか精神病みたいなイメージがあるのか。

D氏：後者だね。不良とは思わない。ひきこもりは…かえって逆に…心の病気よね。じゃねえかな。不良になるくらい、んーまだその気持ちもおきないんじゃない。気構えもないんじゃない、ひきこもりする人は…。

ここでは、B氏とのインタビューの最後で話題になった<ひきこもり>と病気の関係について、D氏は「心の病

気だね」と語るにいたった会話の経緯をほぼそのまま載せた³⁾。D氏はB氏とは逆の見解をしている。「心の病気よね」「不良になるくらい、んーまだその気持ちもおきないんじゃない。気構えもないんじゃない、ひきこもりする人は…」という言葉からは<ひきこもり>者そのものに対する否定的な感情が見え隠れしている。その後、D氏の孫の友達の事例などを語ってもらったのだが、D氏の孫は大都市に離れて暮らしており、近所付き合いなどいろいろな事情なども併せて語ってくれている。

3. 総合的考察(終わりに)

これらのインタビューから次のことはわかるのではないだろうか。本稿で取り上げた4名は、①身近な親族の中に<ひきこもり>状態の者がいないから自身の重大な問題としては語らない。②個々に<ひきこもり>の認識には微妙に違いは見られるが、<ひきこもり>ということが社会で問題にされていることに異議を唱えていない、という2点が共通するといえよう。このうち3名は学校教員経験者であり、現在も何らかの形で教育機関と接点があり、不登校や<ひきこもり>には何らかの関心を持っていることがわかった。彼らは、<ひきこもり>に対して非常に関心が高く、<ひきこもり>当事者自身よりも親の育て方や環境を問題視している(A氏の見解の判断には苦しむが、問題視しているというよりも一段高いところからの啓示的な語りであると筆者は判断している)。

しかしながら、D氏のように、直接の関わりはない者は、<ひきこもり>を病気と関連させることにさほど抵抗を示していないのではないかと推測できよう。

<ひきこもり>は社会との関係で何らかの問題を感じているのであるから、当事者・関係者のみならず、あらゆる人々の持つイメージにも目を向ける必要がある。今回の4名のうち3名は教職関係の経験がある者であり、生涯学習の観点からみれば、指導的な役割を担える存在である。身近な親族に当事者がいない者でも教育機関に関わった者は少なからず関心があることがみてとれた。筆者は、彼らのような立場の者に<ひきこもり>についての意識を高めてもらうことにより、家族を含めた<ひきこもり>当事者と援助専門職の二者関係の援助から、地域社会をも取り込んだ関係作りの可能性があるのではないかと考えている。それは援助を前提とした関係作りではなく、当事者との共生にむけた関係作りというものになるのではないかと。このような視点から、生涯学習が「ニート」の支援とは別な形で<ひきこもり>当事者と社会の接点のひとつになる可能

性が少なからずありそうである。今後は、この試論を発展的に検証するため、様々な角度からの議論・検証・研究が望まれる。

付記

本稿は、日本感性福祉学会第5回大会(2005年10月、東北福祉大学)における報告原稿に加筆修正をしたものを元に再構成しなおしたものである。

注記

- 1) 本稿での「ひきこもり」という言葉には、< >をつけて<ひきこもり>と記している。筆者がこのように表記するのは、この言葉に付随する社会的意味は、現在固定されておらず今後も言葉の持つ意味に変遷があるのではないかと考えているからである。
- 2) 厚生労働省の要請で研究班が組織され、対応のガイドライン作成が進められた(工藤2004:49)。
- 3) 本事例では筆者自身が他者として<ひきこもり>ラベルをめぐる相互作用に参画してしまっている。それはD氏の「ただひきこもりっていう言葉のときの状態はどういうの?」という筆者自身の見解を述べなければならぬ場面に遭遇し、この筆者の見解がのちのD氏の<ひきこもり>イメージの形成に一定の影響を与えるのではないかと指摘にさらされる可能性を否定できないからである。しかしながら、自分と他者との相互作用をテキストとして、相互作用者から一步引いた研究者の立場で、分析をすることによって、研究の客観性は保持され则认为。相互作用者であるかぎり、その場面では価値中立的には到底なりえない。しかし、そのなかで交わされた会話を、後日、分析的立場から考察すれば、分析の客観性にはさほど影響をおよぼさないものとする。したがってここでは、筆者の発言もほぼそのまま提示し、極力その場面の状況の再現に務める必要があり、このような形をとっている。

参考文献

- 上田敏・大川弥生編 1996 『リハビリテーション医学大辞典』医歯薬出版
- 工藤宏司 2004 「ひきこもり」『社会病理学講座第3巻 病める関係性—ミクロ社会の病理—』学文社
- 厚生労働省 ころの健康科学研究事業 地域精神保健活動における介入のあり方に関する研究(H12-ころ-001) 2003 『10代・20代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン—精神保健福祉センター・保健所・市町村でどのように対応するか・援助するか』
- 斉藤環 1998 『社会的ひきこもり』PHP新書
- 斉藤環 2003 『ひきこもり文化論』紀伊国屋書店

武藤清栄 2001 「ひきこもり概念の変遷とその心理」武藤清栄・渡辺健編『現代のエスプリNo.43 ひきこもり』至文堂
Becker, H.S., 1963, *Outsiders : Studies in the Sociology of Deviance*, New York: The Free Press.=村上直之訳 1978 『アウトサイダーズ』新泉社
宝月誠 1990 『逸脱論の研究』恒星社厚生閣

星野周弘 1999 『社会病理学概論』学文社
森田洋司 2004 「逸脱の研究方法」森田洋司・宝月誠編『逸脱研究入門』文化書房博文社
吉岡一男 1991 『ラベリング論の諸相と犯罪学の課題』成文堂
Lemert, E. M., 1951 *Social Pathology*, McGraw-Hill